

## ■特別展

作家生活50周年・源氏物語千年紀記念

# 瀬戸内寂聴展 一生生きることは 愛すること

会期：平成20年6月14日(土)―7月13日(日)

会場：特別展示室 ほか

この展覧会は、瀬戸内寂聴さんが、平成18年(2006)に文化勲章を受章され、作家生活も50周年を迎えたことを記念して企画されました。加えて、瀬戸内源氏とも呼ばれる寂聴さんの現代語訳『源氏物語』全巻完結から10年目の今年、紫式部の『源氏物語』が完成したと考えられる寛弘5年(1008)から千年紀にあたることも記念して、寂聴さんゆかりの品々を通して、寂聴さんの魅力を再確認していただける展覧会です。

寂聴さんは、本県二戸市浄法寺町にある古刹天台寺の住職を昭和62年(1987)から平成17年(2005)までの長きにわたってつとめられ、その復興にご尽力なされました。小気味よい語り口と和顔愛語の「あおぞら説法」は大人気で、住職を退かれてからも続けていらっしゃる。大正11年(1922)5月15日生まれの御年86歳になられた現在でも作家として精力的に執筆活動もなさっています。

悩める人々の気持ちを吹っ切れさせ、元気を与える法話は、彼女の人生そのものから湧き出づる魅力がそうさせていることを実感いただける展覧会です。

### 第一章 寂庵の書齋

寂聴文学の産屋とも言える書齋は、愛用の文具や煎茶セットなどがそのまま再現されています。せっかくですので記念撮影なさってください。

### 第二章 寂庵へようこそ

皆様を誕生仏が迎えます。どうぞお参りください。再現された京都寂庵の門をくぐりますと、遊山箱と呼ぶ花見弁当箱や、川端康成から送られた徳利などが展示されています。源氏物語ゆかりの野宮



写真/斉藤ユーリ

寂庵での寂聴さん

神社や清涼寺のある嵯峨野は、寂聴さんが愛してやまない地です。寂庵の月見台からのおぼろ朧月夜や、苔むす庭に木々や花々の見事さをご想像ください。

### 第三章

#### 寂聴さんお気に入りの美の数々

寂庵を飾った寂聴好みの芸術作品。芸術部屋が出現したかのようです。多彩な芸術家たちとの交流の広さを物語る逸品の洋画や掛け軸が溢れます。

### 第四章

#### 愛してやまぬ人たち 書簡集

近著『奇縁まんだら』にもまとめられています。交遊のあった方々からの、寂聴さんへの書簡が並びます。「生きるということは日々新しい縁を結ぶことだと思ふ。(中略)一度結んだ縁は決して切れることはない。そこが人生の恐ろしさでもあり、有難さでもある。」と書かれています。寂聴さんも様々な縁によって、支えられ、励まされて今日にいらしています。双方のお人柄が浮かび上がってきます。

### 第五章

#### ほれほれする寂聴さん手づくり作品

本物と間違えそうな粘土の野菜。大仏師松久法琳先生直伝の木彫の観音さまや

お地藏様。小石や布の仏さま。色紙に短冊。陶板の般若心経。天台寺の野の花を描いた水彩画。いろんな仏様が怒っていてもどこか愛らしい土仏たち。味わい深いものばかりで、自画自讃なさるのも頷ける、玄人はだしの作品ばかりです。松久法琳師作の彫刻に無心に打ち込む寂聴さんを彫った「尼仏師瀬戸内寂聴」は、その特徴が見事に表現されています。お見逃しなく。



寂聴さん作の「土仏」  
(徳島県立文学書道館蔵)

### 「食べる寂聴さん」写真コーナー

文は寂聴さんで、写真が斉藤ユーリさんによる『素顔の寂聴さん』という写真集があります。寂聴さんの何とも可愛らしい、僧衣ではない、普段の生活を丹念に撮影された写真満載の写真集です。

「いざ仕事に入ると、まるで空気のように自我を消し、邪魔をせず、気づかぬ間にさっさと撮り終えている。まるで十年の知己のように、相手の癖や特徴を的確に掴んでいた。その写真には愛がこもっていた。」と寂聴さんが絶賛し、全幅の信頼を置く斉藤ユーリさんの撮影写真です。食べること大好き。みんなに美味しいものを食べてもらいたい寂聴さんをご覧ください。

### 第六章

#### 晴美と寂聴のすべ

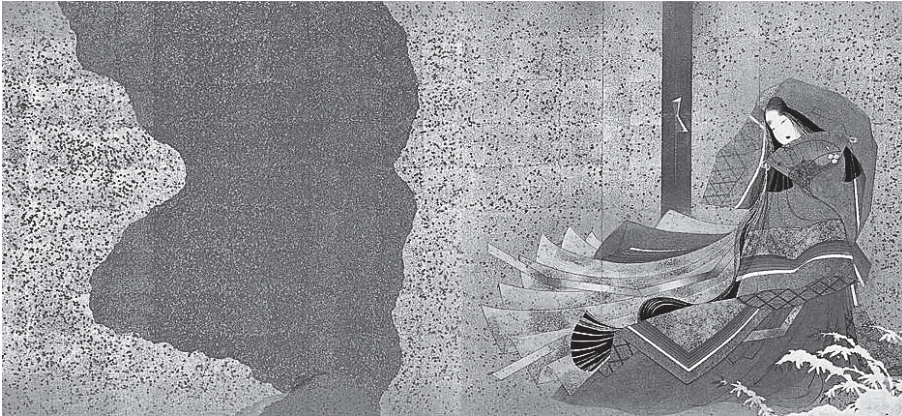
#### 瀬戸内文学と寂聴源氏

小説を書きたいと出奔しゅつぽん。文学の全てを

## 展示解説会

担当者が展示会をご案内いたします。

①6月15日(日) ②7月6日(日) 14:00～15:00 特別展示室 要入館料



「第三十一帖 真木柱」石踊達哉 (講談社蔵)

教えてくれた小田仁二郎との出会いと別れ。「ペン一本にすがって脇目をふらずに生きてきた」作家人生。瀬戸内文学の作品群から寂聴さんの作家人生を振り返ることができます。

現代語訳の先輩である谷崎潤一郎や円地文子と同じアパートに住み、その大変さも充分知っていたからこそ、高齢を押して命がけで挑んだ源氏物語の現代語訳。出家した尼僧ならではの名訳です。直筆原稿などご覧いただけます。



葛籠に保管された直筆原稿「源氏物語」(宇治市源氏物語ミュージアム蔵)

### 第七章

#### 得度式 晴美から寂聴へ

中尊寺での得度直前まで着ていた色留め袖と帯に、剃髪ていはつの髪や挨拶状がご覧いただけます。

### 第八章

#### 天台寺好日 あおぞら説法

寂聴さんは、本堂前に集まった老若男

女たちへ、しあわせの種を蒔き続け、今東光師の悲願であった天台寺再興を成し遂げました。その天台寺の寺宝を紹介いたします。

### 第九章

#### 生きることは 愛すること

寂聴さんの反戦平和活動などを紹介します。こちらで記帳方式の写経をしていただけます。寂庵に納経いたします。

天台寺の観音くじになぞらえて、寂聴さんのおことばつきおみくじコーナーもこちらにございます。

\* \* \*

寂聴さんは、徳島の神仏具店に生まれ、姉艶さんと二人姉妹。阿波踊りや、文楽に親しんで育ちます。7歳で白秋や藤村を知り、小説も読み始めます。13歳、徳島女学校時代に『源氏物語』に出会います。陸上競技の練習に打ち込み、林芙美子や岡本かの子の作品に心奪われる青春時代でした。17歳で百済観音を観て、美しいもの、尊いものを見て涙が湧くことを知ります。18歳、東京女子大学入学。井原西鶴を読みふけり、岡本かの子で卒業論文をまとめました。21歳で結婚し、翌年長女を出産。24歳で中国から引き揚げてきました。26歳、「小説が書きたいしゅつぽんんです。」と夫と娘をのこして出奔。若い

男と京都へ。28歳、正式に離婚。三島由紀夫との文通が始まります。

35歳、『花芯』発表。子宮で小説を書くときまで言われるが、円地文子と吉行淳之介に励まされ、39歳で田村俊子賞受章。執筆に脂がのるものの、妻子ある作家と、出奔の時の若い男との間を右往左往していました。「かの子繚乱」を書き始め、42歳、かの子の気位の高さを利用してやっとな情痴の魔の淵からはい上がります。

51歳、今東光(春聴)師のもと中尊寺にて出家。「出離者は寂(しずか)なる梵音(ほんのん)を聴く」から法名がつけられました。尼僧としてのつとめを果たしつつ、小説も書き続けます。

平成9年(1997)文化功労者記念展示会に際して、「生きているうちに、自分の展示会を展いてもらうなど、夢にも考えていなかったのびっくりしたが、この際、自分の生きてきた道を振り返って見るのも、何かの区切りかも知れないと思った。」と書いています。その後、平成18年(2006)に文化勲章を受章され、今展示会が企画されました。寂聴さんの魅力をあらゆる角度からご堪能ください。

(主任専門学芸員 佐々木勝宏)



有髪最後の色留袖 嵯峨錦の帯 (徳島県立文学書道館蔵)